



好きの時間

Prologue

例えば、目の前のコイツを天使だと認めることで、随分話は楽になる。

けれど、そんなロマンチックな物を俺は信じないのが信条なんで、目の前のコイツは俺の目の錯覚だということにする。

「ちよつと隆也^{りゅうや}、聞いてるの？」

っておい、人が錯覚だと決め付けた直後に喋るんじゃない、まったく、空気の読めない奴だ。いくらお前に白い翼が、ばさー、つと生えていたとしても、妙に真つ白なローブ状の服を着ていたとしても、俺はお前をそんな崇高な存在だとは認めねえ。

「もう、人が折角励ましに来たっていうのに、その態度は無いんじゃないの？」

てめえこそ、その態度は無いだろう。励ましに来たんならもつと柔らかな口調で喋りやがれ、このガサツ野郎。

「あつ、なんか失礼なこと考えてるでしょ？」

自称天使は鋭い目つきで俺を睨む。まったく、どこの世界に眼を付ける天使が居るっつーんだよ、まったく。ああ、そういえばこいつが天使なんだっけ？ いやはや、世界も物騒になったね。俺の天使像は犬と一緒に絵画を見たら天国に連れて行ってくれそうな、優しい天使だったんだけど。

「もう、何でアンタなんかが私を呼べるのよ！」

酷い言いがかりだ。俺はただ学校の屋上で空が茜に染まるのを眺めようとしていただけなのに、俺からしてみれば何でお前が目の前に居るんだっつー話。いや、マジで。

「はあ……」

うわ。コイツ目の前であからさまにため息なんか吐きやがった。それが天使のすることかっつーの。お前なんかが天使なら、水野さんなんか神様なんじゃね？ てか、次元が違う。それこそ、ミジンコとティラノザウルスくらいの違いだ。いつも、にこにこ、と後光が射すような笑顔を振りまくる水野さんとお前じゃあ、比べること自体がおこがましい。ああ、神様すいません。水野さんのような素晴らしい人と、こんな存在自体が罰当たりな奴とを比べてしまっつー！

放課後の屋上で、俺と自称天使は同時にため息を吐いた。いやまったく、どうしてこんなことになったんだろう？

「んでさ、お前何でここに居るの？」

いい加減に無言の対応も限界だったので、元クラスメイトで幼馴染に問いかけてみたりする。まあ、どうせ変な答えしか返ってこないと分かっているんだけどね。

「何でって失礼ね！ 私がここに居ちゃあいけないって言うの！？」

いや、別にそこまでは言っていないけどさ。言っていないんだけど、やっぱおかしいよね、普通。外見的に可笑しいのもあるけど、そんなのはあまり重要じゃない。一番大事なのは目の前の天使を語るコイツ、牧村乙歌^{まきむら いつか}が何故ここに居るかということ。

「いや、居ちゃあいけないだろ、普通」
うん、やっぱ可笑しいって。だってさ、お前昨日死んだはずだろ？

高澤 隆也の場合

いやはや、人間ってのはこうも簡単に死ぬるもんなんだね。いまいち実感の沸かない幼馴染の死に、俺そんな場違いなことを感じた。それはコイツがさっきまで元気だったのを知ってるが故の、状況を消化し切れてない消化不良さによる不信感。

放課後、二人っきりの教室で大宣言。大事な話があるから今日の夜、いつもの公園で。

俺があんなことさえ言わなかったら、こんな結果にはならなかったんだろう。そう考えたら胸が張り裂けそうだった。というか、張り裂けてほしい。

そんなわけで俺は、想いを告げる前にその相手を失ってしまったのだった。いやほんと、勘弁してくれよ。場所を指定するのだって死ぬほど恥ずかしくて、幼馴染相手にしどろもどろになりながらもその旨を告げて、これから決戦だというところだったのに、まさかこんな結果になるうとは。なるほど、神様なんて存在しないんだね。

怨むべきは自分自身。あんな事を言わなければこんな事にならなかったのにと、狂った機械のように自問自答を繰り返し続ける。俺のせいで、俺のせいで……乙歌は死んだ。

こちら、いい加減に起き上がりなさい。そんな顔に白い布なんて被っても、俺は騙されないぞ？ いや、騙されてやるから起き上がれ。でないと俺は本当に、お前が死んでしまったんだと認めざるを得ないじゃないか。

結果的に。俺の幼馴染で想い人だった牧村 乙歌は死んでいた。

公園に面する四つ角の交差点で、車に撥ねられたのこと。いやはや、お前も星の巡りが悪い女だね、まったく。まあ、俺も悪いほうだとは思うけど。

そう。だから可笑しいのだ。

嫌な言い方をすれば、目の前にお前が居てはいけない。うん、こうやって目の前にあっけらかんとお前が居ると、昨日あんなにも打ちひしがれて眠れずに、寝不足な目を擦りながら登校してきた俺が馬鹿みたいじゃないか、まったく。

「まあ、でも」

「ん？ どうした？ 隆也」

「またお前と喋れて嬉しいよ、本当に」

これは俺の本心。いつもは恥ずかしくて上手く喋れなかったけど、今なら言える。きつとこれは夢だから。俺の信条的にやっぱコイツが天使なんだとは思えない。きつと俺の弱い心なんかが生んだ、幻か何かだろう。けどそれで良い。独り言だって構わない。二度と伝わることの無い俺の想いを、自分の夢にぶつけて相殺しよう。そうすれば、俺は初めて泣け

るだろう。乙歌と真っ直ぐ向き合うために、自分を律する為に独り言を。

「にしてもお前、空気読めなさ過ぎ」

明らかに独り言。しかも夢の中で。だからきつと、空気が読めていないのは俺の方。お前が死んですぐに、まさかこんな夢を見るなんて。

「どういう意味よ？」

理想通りの反応をする乙歌。ほらやつぱりね。これは夢。でも、自分でも情緒不安定だと分かる今、この夢はありがたい。

「いやだって、告白する日に何も死ななくていいじゃないか」

自分の勇気を最大限に総動員しての大イベントだったというのにね、まったく。

俺が苦笑する横で顔を茜に染める乙歌。まったく、こんなところも生前そっくりだ。そしてそれが分かるくらいに俺は、コイツのを見ていたんだ。なんて、再確認してしまった。

「告白って……」

弱弱しい声。へえ、こんな声も出せるんだな、お前。

「俺さ、お前のこと好きだったんだよ」

もう決して伝わることはないけどね。

俺はずっと、ずっとお前のことが好きだったんだ。

「……本当に？」

「嘘言ってどうするんだよ」

自分の夢の中なのに、嘘やお世辞なんて言わない。——って、何で泣き出してるの、お前！

「勘弁してくれよ」

何で自分の幻想なんか困ってるんだろう、俺。というか、笑いながら泣くなんてどんだけ器用なんだよ、お前。

笑っているが止まることの無い乙歌の涙。それを拭おうと右手を伸ばす。確かに彼女の頬に手を伸ばしたはずなのに俺の手は彼女の体を、するり、と通り抜けてしまう。いやはや、折角のご都合なんだから、ここは触れられないのはどうなのよ。夢でもいいからお前を感じたかったのに。

「残念だ」

本当に残念だ。肝心なところで上手く機能しないなんて、どれだけ悔しい夢なんだ。

「だね」

乙歌は笑う。俺は笑えてるか？ いまいち自分の現状が虚ろ気。やつぱり夢だ。ほら、乙歌の顔がぼやけてる。

後ろで錆の軋む音。屋上の鉄扉を誰かが開けたらしい。

かつかつ、とひび割れの多いタイルを叩く音がする。つと、音の正体は水野さん。さすが夢。両手に花とはまさに「ご都合主義な展開だ。いや、嬉しいけど、今はあまり着てほしくなかった。できればこの夢は、綺麗なままで。

水野さんの姿を見たからだろうか？ 乙歌は俺達に笑いかけると、最後は天使らしく、

「じゃあね隆也。彼女のことを幸せにしないさいよ？」

と、まるで煙幕のように白い羽を撒き散らして飛んで行く。最後くらいもっと綺麗に去っていかばいいのに。まったく、最後の最後まであいつらしい。

「ありがとな」

俺はお前のことが好きでした。ごめんなさいなんて言ったら怒られそうだから、最後は感謝。うん、俺の夢にしては出来すぎていた。

いつの間にやら、俺の隣には水野さんが。どうもまだ、夢からは覚めていない様子。その証拠にほら、彼女の手は俺の手を包んでくれている。

気恥ずかしさを感じて視線を逸らしてみれば、茜空には白い羽が揺れていた。

牧村 乙歌の場合

私は、この世の最高と最低を同じ日に体験した。

今朝は確か、いつてきます、と明らかに扉としての寿命が見え隠れするドアを勢い良く開けて登校したはず。貧乏を通り越して借金がある我が家で生きるには、過剰に明るいくらいが丁度良いのです。

うん、思い出してきた。今朝はラッキーなことが起こりそうだ！　なんて予感に包まれながら、学校に登校していた。毎回のように順位の低い射手座が、今日に限って一位になるなんてことが起きたから、私は、ルンルン、と意気揚々に学校に行っただった。いや、本当に“モーニングウォッチ”の星座占いは射手座が上位に来ることなんて、そうありっこないのです。

ちなみに今日の幸運さんである私のラッキーパーソンは噴水のある公園。カラーはオレンジ。そんなわけで、私の髪ゴムはオレンジ色なものでした。もちろん、少し遠回りになるけど公園を通って学校に行ったはず。

でも特に何も幸運に恵まれることもなく時間は過ぎていって放課後に。星座占いへの信用が地に落ちた頃、

「大事な話があるから今日の夜、いつもの公園で」

と、幼馴染の高澤 隆也に走り去られたんです。走っていくあいつの背中を見て、腰が抜けちゃいそうでした。近くに椅子があつて良かったなんて、ぼう、と考えながら、私は彼の言葉をずっと反芻してたのを、よく覚えている。

大事な話。大事な話。大事な話……ってな具合に。しかも指定された場所は私のラッキーパーソンである公園！　しかも、私と彼が幼少時に良く遊んでいた公園には噴水が！

ほら、私だって一応年頃の女の子なわけだから、男の子からの大事な話っていうのには大体目星が付いちゃってますし？　しかも決戦は私のラッキープレイスなわけでしょ？　やった！　ずっと片思いだったアイツも、やっと私の魅力に気づいてくれたんだ！

なんて、少し暴走し始める妄想を必死に押さえつけ、つい、にやにや、としてしまう顔を冷静に取り繕って、私は何食わぬ顔を意識して教室を出たんです。

そういえば、廊下ですれ違った水野さんに、表情からさっきのことがばれてしまわないか焦っちゃったことを、覚えてる。いや、別にばれたところで何も起きないのですが。

家に帰ったらいつもの陰気な雰囲気。いつもだったら嫌いなあの雰囲気さえ、あのときの私は祝福に感じていました。それくらいに私は隆也のことが好きだったのです。もちろん、さっきのあれが私に対しての物なのかはまだ分かりませんが、十中八九愛の告白だと踏んでいました。だからでしょう、母親のいつにもまして浮かない顔や、この時間はまだ仕事をしているはずの父親を気にも留めなかったのは。いや、まあ、大して珍しい出来事でもないのですけど。

そして、私は空を飛びました。

文字通りに飛んだのです。正式には撥ねられたというのが正しいのでしょうか。

早く楽になりたかったから。この逸る気持ちを抑えきれずに、交通ルールを無視して道路を渡ろうとして。私はトラックに撥ねられて死んでしまったんです。

痛みは本当に一瞬だったのが不幸中の幸いというやつでしょうか。まあ、それでも死んでしまうくらいには痛かったです。でも、そんなことすら些細だと感じてしまうくらいに、私の宙ぶらりんになってしまっているこの想いの行く末が、不憫で不憫でなかったのを覚えています。

そう、私はそんな心残りな状態のまま、目を閉じたのです。

そうして、星座占いを信じなくなった代わりといっちはなんです。私は神様を信じるようになりました。いや、信じるのも何も次の瞬間に目を開いたらそこに、本人がいらっしゃるのからなんですけども。私はそこまで熱心な神の信仰者ではないのですが、こうして目の前に存在なされると、やっぱり信じないといけないわけです。

一面真っ白な世界で彼は言いました。「君を惜しむ三人の所へ」と。

気づけば私の背中には純白の翼とローブのようなこれまた真珠のようなローブ。

ああ、まるでこれは——天使みたい。

自分の格好ながら惚れ惚れしていると(それくらいに、この出で立ち目は奪われます)、途端に世界がホワイトアウトしていききました。神様らしい人とは五分もしないうちにお別れでしたが、彼からの最後は、「心残りにならないように、遺言を唱えてきなさい」とのことでした。

ゆっくりと瞼を開けるとそこは私の家。見慣れた陰気な茶の間には両親が居ました。以上、回想終わり。これまでの考察から判断するに、私を惜しむ人の一人(二人?)が両親だったということなんでしょうか？

「い、い、乙歌なの？」

明らかに動揺している母を安心させようと、私は縦に首を振った。

母は何とか落ち着こうと取り繕っているけど、父はずっと私を指の合間から覗いていて、

口をばくばくさせている。確かに死んだ娘とこうして再会するなんてシチュエーションからすれば、当然の反応なのかもしれないけど、何だかそれは悲しすぎます。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

あつ、口を動かしてると思ったら、お経を詠んでいたんですか？ ……なんか酷くありません？

私が、「お父さん」と呼びかけても浄土宗しか返ってこないの、私は諦めることにしました。あんなに普段は強気な父が、まさかこうも不思議に弱いとは思っても見ませんでした。

「お母さん」

私の呼びかけに少しだけ肩を震わせる母。やっぱり少しだけ怖がられているみたいです。そりゃあ、出で立ちこそ神々しいので、悪霊とは思われていないでしょうけど、やっぱりこんな再会是不気味なんでしょうね。

「乙歌、ごめんね？」

何がですか？ お母さんは何も悪いことしていないのに、何で謝るんですか？

「助けてあげなくて——ごめんね？」

母は涙を流しながら呟きます。もう、お願いですから泣かないでください。それに、そんなことで罪悪を感じないでください。目の前で死んだわけじゃあないのですから、誰もお母さんを責めたりしませんから。

「お母さんは悪くないよ」

誰も悪くないんですよ。そう、ただ運が悪かったただけなんですから。

母はその言葉に首を、ぶんぶん、と振って、自分が、自分が、と己を責め続けます。

「そんなことないよ、お母さん。それに、そんな風じゃあ、私、安心できないって」

あくまでも笑いながら、自分の死をここでやっと認識できました。

なるほど。確かにこのプログラムなら、嫌でも自分が死んだのだと認識せざるを得ないです。

神様は死んだと認識できていない私に認識させるため、お別れをしに行くという名目をつけただけに過ぎなかったのですね。

私の言葉に、母は泣きながらぎこちない笑顔を作って見せてくれました。私もそれに合わせて笑います。だって辛気臭いお別れより、ずっとこっちのほうが素敵ですから。

「あのね、お母さん」

「なあに？」

まるで子供の頃に戻ったような、優しい問答。成長するにつれ次第に消えていった、暖かな感覚。

「大好き」

「ふふ、ありがと」

母親はそう言いながら立ち上がり、私に触れようとしたが、それは遂に叶いませんでした。

した。残念そうに虚空を掴む母。でも、その表情からは悲しみの気はさほど感じません。

あつ、どうやら次にいかないといけないみたいです。体が勝手に消えていきます。

「もう、行っちゃうの？」

本当はもう少し話をしたかったのですが、わがまま言える立場じゃないことも分かっていきますので、素直に頷いておきました。——あつ、そういえば遺言を残さないと！

「お母さん！」

「なあに？」

雰囲気が変わったからか、真面目な表情を取る母。その隣では未だに、ガタガタ、と父が念仏を唱えている。まあ、効かないのですけどね。

「モーニングウオッチの星座占い、あれ当たらないからね！」

その言葉に、母親は肩透かしを食らったようでしたが、最後には大笑いしてくれました。



次に視界が広がると、飛び込んできたのは夕暮れの赤。周りには見覚えのある椅子や机などが均等に並べられている。どうやら、私の通っている母校のようです。

教室には一人、窓を通して茜を見る女性。水野 みずの 美紀 みき さんが居ました。

「水野さん？」

つい漏れてしまった言葉に、彼女は驚いたように振り向くと、

「え？ ——えっ？」

なんて、可愛らしい反応してくれます。うん、愛護心を擽られるとはこういう人の為にあるんですね。

「——何で、えっ？ ほら、だって！ まきむら、さん？ えっ？ だって、だって！」

混乱している水野さんは見えて飽きないですけど、流石にそれは酷すぎますので、こちら辺で助け舟。

「落ち着いてください、水野さん。別に取って食ったりしませんから」

漏れる苦笑を微笑に代えて。怖がらせないように優しいトーン。そう、それこそ本物の天使のように。

そして私は彼女に落ち着いてもらうため、事情を話しました。残せなかった遺言を残して回っているのだとか、その対象は、自分を想ってくれていた人だとか。

……あれ？ そういえば何で水野さんの前に現れたんでしょう私。喋らない仲ではなかったですけど、失礼ながらそこまで親しかった記憶がありません。

「じゃあ、本当に？」

水野さんの言葉に我に返りました。別にそこは追求すべきところじゃないですね。私がどう思おうと、彼女は私のことを想っていてくれたということなんですから。

私は、こくん、と縦に頷くと、水野さんは「そっか」とだけ呟きました。もっと驚いてく

れてもいいようなもんですけどね。

「あのね、牧村さん」

「なんですか？」

意を決したかのように、水野さんは私を真っ直ぐに見据えます。どうしたんでしょうか？

「牧村さんは私の前に家族と会ったって言ったでしょ？」

それに頷く。

「それで私で二人目。最後は誰と？」

「えっと、それは実際に行ってみないと分からないんです」

だって、現に二人目が水野さんだとは知りませんでしたし。

「そっか……」

何故そんなことを聞いたのか分かりませんでしたが、彼女は途端に辺りを見回したり、手を組んだり話したりと、落ち着きがなくなってきました。どうしたのかな？ あつ、急に姿勢が正しくなりました。いったい何が起るんでしょう？

「あのね、牧村さん。私、高澤君のこと——好きなんだ」

彼女の告白は、私の頭を水浸しにするかのように、じわじわ、と思考を奪っていきます。えっと、ああ、なるほど。だから落ち着きがなくなっていたんですね。って、そうじゃなくて、えっと、水野さんは隆也を好き？ って、何でそれを私に言うんですか？ だって、もうそんなこと言わなくても……。もう、もう私はアイツに届かない。身も、心も。

「そうなんですか」

ぼつり、と。それしか言えませんでした。

あの、神様酷すぎませんか？ もう私は死んでるのに、まだ私は苦しまないといけないんですか？

そうして、まるでこの場から逃げるように、もうお別れの時間のようです。えっと、最後に遺言を残さないと。でも、何を言えればいいんですか？ 恋のライバルにエールを？ でも、もうライバルでもないんですよね。私はゴール目前で……。アイツを目の前にしてリタイアしてしまったのですから。

「水野さん」

沈黙を誘う空気が流れていた手前、私の声はこの、ガラン、としていた教室に響きます。私を真っ直ぐに向く水野さん。良く見れば少し震えています。だからでしょうか？

「頑張ってね」

なんて最後に作り笑いをしてしまったのは。

そうして。戦えもしなかったライバルの目の前で、私は戦うこともできずに消えて行った。



まるで酔ってしまいそうなくらいに強い光をやり過ぎ、ゆっくりと目を開ける。最初に

飛び込んできた風景は、先ほどと同じ茜色。けれど視界に入る絶対量が違う。だってここは学校で一番空に近い場所だから。えっと、屋上はいいんですけど、私はどうすればいいんですかね？

今までのパターンだと、遺言を送る相手が目の前に居たのに、今回は私だけ、ぽっーんと一人ぼっちです。さて、どうしたもんでしょう？

いいアイディアも浮かばないのでしょうがなく、ぼう、と屋上から地上を見下ろしてみたり。あはは、みんな小指より小さくて、つい変な優越感に浸っちゃいます。

でも、ほんの少しだけの愉快的気持ちはすぐに失せ、私は地上に居る人間を小指で採寸しながら、さっき水野さんに言われた言葉が頭から離れません。

「あのね、牧村さん。私、高澤君のこと——好きなんだ」

……私だって好きだもん！

ずっと、ずっとアイツが小さいときからずっと、好きだもん！

アイツが私の身長を追い越すのも、アイツが嫌いだったにんじんを食べれるようになるのも、私は全部知ってるのに、なんで！？　なんで私の想いはもう、アイツに届かないの！？　私だって、私だって、うーん！　私の方が隆也の好きだもん！　なのになんで、私は死んじやったの？　もう少しだったのに、もう少しだった。アイツの気持ちを知らないまま、私は死にたくなかったのに！

我慢してたんじやない。

ただ、実感が沸かなかった。

死んだのも突然だし、突然こんなことをすることになったし。自分で自覚さえできないまま、整理なんてさせてくれないまま、私は今の今までやってきたのに。でも、こうして一人で居るとどうしても意識してしまう。死んでしまったことを再感してしまいます。ああ、なんで私は死んでしまったんですか！？

どうしようもできない状況に泣きそうになっていると、背後から錆の擦れた音がしました。うん、この屋上の扉は家みたいな音がするんですね——じゃなくて！　どうやらやっと、最後の相手が来たようです。

……まあ、実を言うと。私は少しだけ目星が付いちゃってます。

そりゃあ確かにさっき水野さんに呼ばれたのは少し意外でしたけど、私を想ってくれる人を最初に連想するとすればあの出来事が相成って、私はアイツのことしか考えられませんか。

だというのに、一向にアイツが私を呼んでくれないからすごく不安でした。

私はゆっくりとドアの方へと振り返ります。

ほら。私の予想は当たってました。やっぱり最後は君じゃないと嘘だよね。

どうしよう。予想はしていたのですが何だかすごい嬉しいです。さっきまでの不安を総て

帳消しにしてしまうくらい、こいつのことが好きなんだ。なんて考えて少し恥ずかしくなりました。

でも、感動の再会は、

「うお、何でお前居るの？」

なんて、ロマンチックな雰囲気欠片も無い言葉で打ち消されてしまいました。というか、最低です。でもまあ、最初はしょうがないかな。なんて少し妥協してみたり。そりゃあ、死んだはずの人間がこうして目の前に現れたら誰だってこんな反応だと思いますし。

「会いに着ちゃった」

もっと上手い言い方があるでしょ？ 私の馬鹿！ つい突っ込んでしまうくらいに直球な答え。でも、上手い説明もしにくいのも事実ですので、しどろもどろですが、順を追って説明していくことにしました。

私が自分の身の上を説明することに、それに比例する形で隆也の顔も不信感が見て取れるようになってきました。明らかに信じられていません。まあ、しょうがないかもしれません。昔からコイツはそうでしたから。お化けとかの特集番組を怖がる私を鼻で笑い飛ばしていたようなやつですので、きっと天使なんて言われてもしっくりこないのでしょう。

「ちよつと隆也、聞いてるの？」

私の言葉にあまりいい反応をしてくれません。本当にコイツは捻くれてます。根は素直なんでしょうね。

「もう、人が折角励ましに来たっていうのに、その態度は無いんじゃないの？」

この出会いは時間制限がありますから、私は彼の煮え切らない態度とでも言うのでしょうか。それを待っている気ありません。それにしても何でしょうね、このふてくされた顔。

「あつ、なんか失礼なこと考えてるでしょ？」

絶対にそうです。断言します。あまり彼は人のことをとやかく言わない方ですが、内心は皮肉だらけですからね。絶対にそうです。彼の中で私は馬鹿にされているような気がします。ええ。ですからつい、

「もう、何でアンタなんか私を呼べるのよ！」

なんて、ずるいことを言ってしまった。答え辛い質問だからでしょう。隆也はますます苦い顔をしたままです。というか、どうしたら彼が素直になってくれるんでしょう？ 私はこんなことがしたいわけじゃないんですけど。つい、ため息が漏れちゃいます。

そんな私を見かねたのか、

「んでさ、お前何でここに居るの」

隆也はそんなことを言いました。というか、さっき説明したじゃないですか！ 本当に信じてないんですね、こういうの！

「何でって失礼ね！ 私がここに居ちゃあいけないって言うの！？」

売り言葉に買い言葉。あはは。本当に泥沼に埋まっていくみたいに。綺麗に上手くいきません。

「いや、居ちゃいけないだろ、普通」

もう、分かりましたから止めを刺さないでよ。また、ため息が出ちゃいました。

「まあ、でも」

「ん？ どうした？ 隆也」

彼は少し投げやりになっている私の言葉に苦笑しながら、

「またお前と喋れて嬉しいよ、本当に」

なんて、恥ずかしい台詞を吐きやがりました。もう、そんな最初からそう言ってくれないから、涙の代わりにため息が出ちゃうんですよ？ 本当に。

「にしてもお前、空気読めなさ過ぎ」

って、そんなに早くさっきの台詞を帳消しにしないでいいと思うんですけど？ いや、

もう少し余韻とかあるでしょう！ もう、馬鹿！

「どういう意味よ？」

だからでしょう、不機嫌さがありありと口調に出てしまいました。

「いやだって、告白する日に何も死ななくていいじゃないか」

……私の感情を上下にさせるのが本当に上手いですね、隆也は。きっと好きだからこんなにも反応ちやうんでしょうけど。

でも、嬉しい。やっと、彼の口から本心が聞けました。今の今まで、本当は告白じゃないんじゃないかとか、少し不安になっちゃう時もありましたから、その言葉は私にとって、長く、長く。ずっと待ち望んでいた素敵な言葉。

「告白って……」

少しずるいですけど、気づかなかったふり。少しくらいは駆け引きじゃないですけど、自分の価値を上げておきます。まあ、もう意味のないことなんですけどね。って、自分で思ってたんだか悲しくなってきました。

「俺さ、お前のこと好きだったんだよ」

うん。ありがとう。私も大好き。

もう決して届かないですけど。

私も。ずっと隆也が好きでした。

「……本当に？」

もって言うってください。もう届かない私に、せめて言葉だけでも。下さい。

「嘘言ってどうするんだよ」

ぶっくらばうだけど、彼なりの優しい表現。もう、本当に隆也らしくて笑っちゃって。涙が溢れちゃって。もう、私の心で遊ばないで下さい。さっきから嬉しいんだか、悲しいんだか分からなくなってきたじゃないですか。

「勘弁してくれよ」

昔からのお決まりの台詞。泣いている私への優しい言葉。この後には必ず彼は、私の涙を拭ってくれるんだ。

でも、伸ばされた手は私の体を、するつ、と抜けてしまいました。自分の体を通過する彼の手。こんなにも近いのに、なんて遠い。まるであの空みたいです。

「残念だ」

「だね」

うん。本当に。

できれば私の頬を触ってほしかったです。拭ってもらえない涙は流していても悲しくなるだけです。ほら、笑って？ 私。でないと彼の心に傷を残してしまうよ。好きな人を傷つけないでしよう、私。だからほら。笑おうよ、ね？

少し無理やりですけど、何とか笑顔を作って見せます。きつと鏡を見たら不細工な笑顔なんだでしょうけど、こっちのほう泣きながらお別れなんかより、ずっと、ずっと素敵です。だからほら、隆也、泣かないでください。

私が隆也に泣かないように促そうとしていると、ぎい、と錆びたドアの開く音がしました。扉の向こうから歩いてくるのは水野さん。ああ、どうやらバトンタッチの時間のようです。本音を言えば、私は真性の天使なんかじゃありませんから、そりゃあ口惜しいです。でも、好きな人に幸せになってほしいと願う気持ちだけでいうのなら、私だって立派な天使。私の想いを口に出したら傷を残すでしょうから、彼をとびっきりの笑顔で振ってやることにしました。

「じゃあね隆也。彼女のことを幸せにきなさいよ？」

ばいばい、隆也。大好きだよ。

正反対の心と言葉。どちらも共通してるのはコイツへの想い。

ああ、本当にもう時間みたいです。それじゃあ本当にさようなら。

大好きだった高澤 隆也の顔を目に焼き付けて、初恋は実らないというのは本当なんだ。なんて間抜けなことを考えながら飛び立っていく。

もし生まれ変わることがあれば、絶対に占いなんて信じないようにしよう。なんて薄れていく思考の果てにそんなことを考えた。

大好きだよ、隆也。

水野 美紀の場合

私を殺人犯だと思ってる貴方。それはある意味で正解。でも、限りなく不正解だ。確かに関係図的に私には動機がある。

しかし、真実は全て私の背後で行われているのだ。

昔から、欲しいものは全て手に入る環境で育った。

大きな熊のぬいぐるみも。今や私より重くなったゴールデンレトリバーも。どれもこれも

みな、私がほしいと言う前には、私の物になった。

今考えれば酷く溺愛されていたと、つい苦笑してしまう。私は物ほしそうに見ているつもりは無いのだが、他から見ればそう見えるのかもしれない。

蜂蜜のように甘い環境で育った私は、周囲の友達と自分を比較することで、自分がいかに甘い環境に居たのかが分かった。それから私は、なるべく物をほしいと思わないようにし、親からのプレゼント攻撃に予防線を引いた。

子供ながらに分かっていたのかもしれない。何でも手に入ることは嬉しいこと。でも、きっとそれは自分を形成する上では間違ひなく良くないと。行き過ぎた甘さはきつと自分の今後を歪ませるのだと。

小学生の中盤から中学を卒業する現在に至るまで、病的と言っているほどに、私は何も欲しなかった。別に生活するうえで必要最低限の物さえあれば良いというだけ。でも、両親は私のそれを、酷く心配していた。嗜好品に塗れた環境に居る自分達からすれば、同じ環境にいながら何も欲しない自分はさぞ異端に映ったのだろう。

そうして私は高校生になった。月日は流れても、やはり両親は物欲に塗れ、私はそれを半ば軽蔑するかのように、無欲に生きた。まるでそれが格好良いと言わんばかりに。

しばらく高校に通い、慣れ始めた頃に。私は久しぶりに自分の鼓動が鳴るのを聞いた。自分で言うのも変かもしれないが、あれは一目惚れというやつだったと思う。

そうして、私は毎日のように。それこそ、今まで自分を抑圧してきた反動のように。高澤隆也君を目で追いかけた。

毎日のように、彼を見ていたから。だから、気づいてしまうのも早かった。彼もまた、私のように誰かを目で追いかけているのだということ。

その相手は彼の幼馴染である牧村 乙歌さん。本当に可愛い人で、確かにこの人なら。なんて思ってしまう。

でも、私は彼のが好きになってしまったし、告白もしないで諦めるのも嫌だった。

しかし、私は少しばかり気づくのが遅くて、決断するのも遅かったみたい。

少しは女の子らしく、テレビの星占いでも射手座が一位になったら告白するんだ、なんて願を掛けたのがいけなかったよう。私が告白を決めた当日に、彼が乙歌さんに告白してしまったのだ。

放課後に告白するチャンスを探っていた私は、丁度彼の告白を聞いてしまった。頭が真っ白になるというのを体験してしまったのを覚えている。

それから私は酷い脱力感に襲われながら帰宅して、ベッドに潜り込んだ。

後日、彼女がトラックに撥ねられて死んだという知らせを連絡網で知った。

私はどうしていいか分からずに、ただただ部屋を歩き回った。そして、紅茶でも飲んで自分を落ち着けようと廊下を歩いている時に、私は真相を知ってしまったのだ。

それは両親の部屋から漏れた声。その内容を思い出すだけで吐き気がするので要約すれば、牧村家の財政が厳しくて。裕福な我が両親が彼等を援助しただけ。

そう。ただそれだけ。

これがこの事件の真相。そして、これから起きる事件への動機。私の手には台所にあった包丁。

我慢の限界だった。娘の為なら人の命をも買い取る親への限界。だから、ある意味で貴方の疑問は正解。

私はこれから、貴方が予想したモノへと成る。

ごめんね、乙歌さん。

私も今すぐにそっちへ行くから。

こんなことをしたらきっと高澤君に軽蔑されるだろうな。

最後に大好きな彼の顔を思い出して、私は廊下を歩いている父親を見つけた。

了